

## WWFの要望

WWFは、太平洋クロマグロの資源管理のため、以下の提案をおこなっています。

### RFMOや各国政府に対して

- 太平洋クロマグロの長期的な資源回復計画、限界/目標管理基準値およびに漁獲制御規則を採用するよう働きかけること。
- ISCの勧告に基づき、すべての太平洋クロマグロの未成魚漁獲量を50%削減させる漁獲制限を設けること
- クロマグロ蓄養における適切なアセスメント(環境影響評価)のため、追加の調査・分析を実施すること
- 太平洋クロマグロにおける漁獲証明制度の実施と、トレーサビリティの確立。太平洋クロマグロの漁獲活動のモニタリングと管理強化



築地市場における冷凍マグロの競り

© Michael Günther / WWF-Canon

もし2014年中に効果的な管理方策が採択されなかった場合、WWFはIATTCとWCPFCに対し、枯渇しそうな資源を過剰漁獲している現状の漁業をすべて中止・禁漁とし、早急に厳格な資源回復計画を準備することを求めます。

### マーケットに対して

- トレーサビリティを確保し、IUU(違法・未報告・無規制)漁業由来のマグロを取り扱わないこと
- 持続可能な漁業への変換(MSC認証取得など)をサポート
- 未成魚の取り扱いを控えること

### 参考文献

1. Hiromu Fukuda et al., Preliminary Population Dynamics Model for the Updated Stock Assessment of Pacific Bluefin Tuna, ISC/14/PBFWG-1/03
2. IATTC SAC, 2014, RECOMMENDATIONS BY THE STAFF FOR CONSERVATION MEASURES IN THE EASTERN PACIFIC OCEAN, 2014, DOCUMENT IATTC-87-03d
3. ISC PACIFIC BLUEFIN TUNA WORKING GROUP, 2014, STOCK ASSESSMENT OF PACIFIC BLUEFIN TUNA 2014.
4. ISC PLENARY SESSION, 2013, REPORT OF THE THIRTEENTH MEETING OF THE INTERNATIONAL SCIENTIFIC COMMITTEE FOR TUNA AND TUNA-LIKE SPECIES IN THE NORTH PACIFIC OCEAN
5. Kazuhiro Oshima et al., 2014, Updates of input data for stock assessment model, Stock Synthesis 3, on Pacific bluefin tuna., ISC/14/PBFWG-1/05
6. Mark N. Maunder et al., 2014, STOCK STATUS OF PACIFIC BLUEFIN TUNA AND THE URGENT NEED FOR MANAGEMENT ACTION., IATTC SAC 5th meeting Document SAC-05-10a.
7. Mark N. Maunder et al., 2014, PROPOSAL FOR BIOMASS AND FISHING MORTALITY LIMIT REFERENCE POINTS BASED ON REDUCTION IN RECRUITMENT., IATTC SAC 5th meeting Document SAC-05-14
8. Yukio Takeuchi et al., 2014, Updated future projections of Pacific bluefin tuna with draft results to answer the requests from NC9., ISC/14/PBFWG-1/10rev
9. 水産庁, 2014, 太平洋クロマグロの資源管理について, 第3回資源管理のあり方検討会資料3-1
10. (独)水産総合研究センター国際水産資源研究所, 2011, 平成25年度国際漁業資源の現況

**私たちはWWFです**  
 人と自然が調和して生きられる未来を目指して、地球規模の悪化をくい止めるさまざまな活動を実践しています。  
[wwf.or.jp](http://wwf.or.jp)

**問い合わせ先**  
 植松 周平  
 水産担当(マグロ)  
[uematsu@wwf.or.jp](mailto:uematsu@wwf.or.jp)  
 Tel: 03-3769-1713

WWFジャパン  
 (公財)世界自然保護基金ジャパン  
 〒105-0014 東京都港区芝3-1-14  
 日本生命赤羽橋ビル6F



## Sustainability



# 太平洋クロマグロの現状と資源管理について



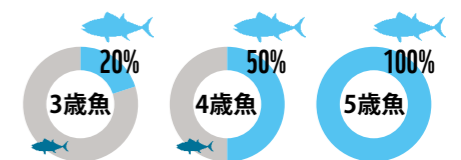
© Brian J. Sherr / National Geographic Stock / WWF

太平洋クロマグロ(本マグロ)の資源量が、危機的な状況にあります。北太平洋まぐろ類国際科学委員会 (ISC) の最新の報告によると、資源量、回復の水準いずれも、歴史的な低水準となっています。最大の消費国である日本をはじめとする各漁業国は、太平洋クロマグロの資源回復のための漁業管理を、早急を実施することが求められています。

## 太平洋クロマグロの生態

太平洋クロマグロ(*Thunnus orientalis*)は主に北緯20~40度の北太平洋温帯域に分布しています(図1)。産卵場は南西諸島周辺(4~7月)と日本海南西部(7~8月)で、ふ化後は、日本沿岸を、餌を探しながら移動します。また、1歳ごろになると太平洋を横断し、アメリカ大陸西岸で数年過ごした後、産卵のために日本周辺へ戻ってきます。<sup>10</sup> なお、太平洋クロマグロが産卵できるようになるまで、3~5年かかります。

### 年齢別の成魚の割合<sup>3</sup>



■ 比較的高密度に分布する海域 ■ 産卵の可能性が高い海域 → 未成魚の回遊 ( - - - 推定)

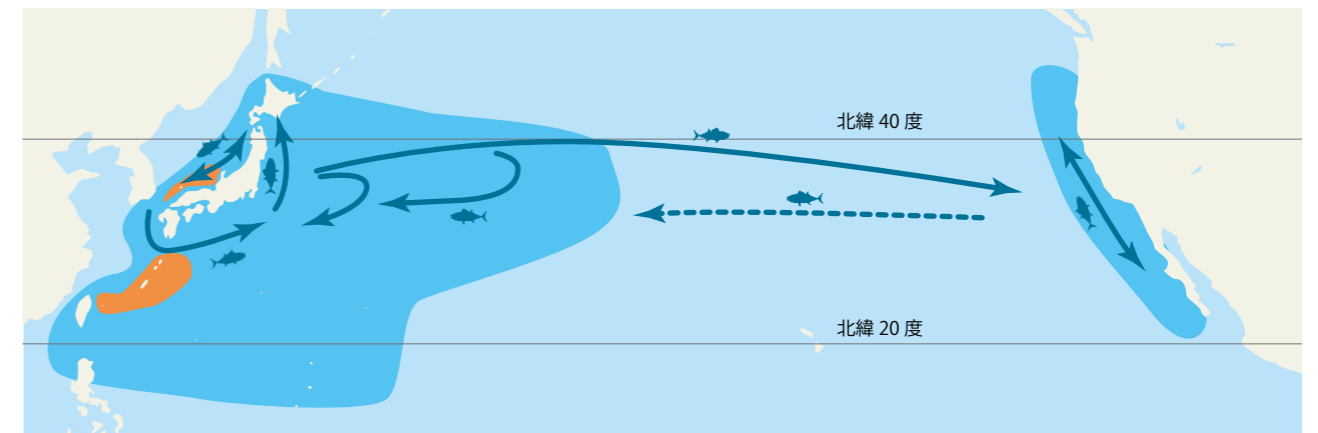


図1 分布・回遊経路と産卵域

## 太平洋クロマグロの漁業について

太平洋クロマグロの漁獲量は、ピーク時には3万5千トンを超えていましたが、近年は1万5千トンほどに低下しています(図2-1)。<sup>4,5</sup> また、漁獲した太平洋クロマグロのほとんどが未成魚(3歳未満)で、その割合は約97%(尾数ベース)に増加しています(図2-2)。<sup>10</sup> 太平洋クロマグロ未成魚は、その大半が日本、韓国、メキシコによるまき網漁で漁獲されていますが、その他にも日本沿岸の曳き縄・手釣り漁や定置網漁でも漁獲されています(図2-3)。<sup>1,10</sup>

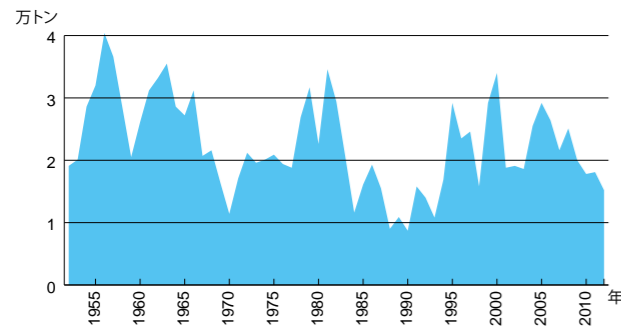


図2-1 漁獲量の推移

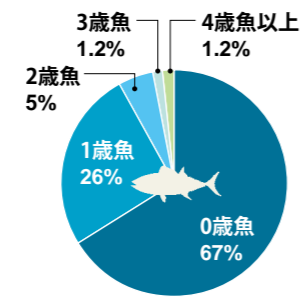


図2-2 年齢別漁獲尾数割合 (2001-10年平均)

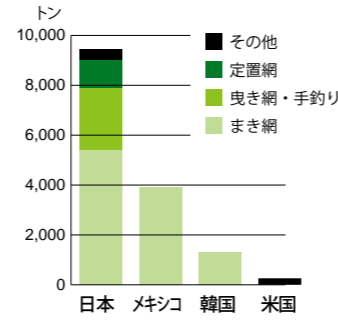


図2-3 未成魚 国・漁法別漁獲量 (2001-10年平均)

## 地域漁業管理機関 (RFMO)

太平洋クロマグロの管理は、西部太平洋については中西部太平洋まぐろ類委員会(WCPFC)、東部太平洋については全米熱帯まぐろ類委員会(IATTC)が行っています(追加図)。また、科学データについては、ISCとIATTC科学諮問委員会(IATTC SAC)が調査・集約し、WCPFC・IATTCに提供しています(図3)。

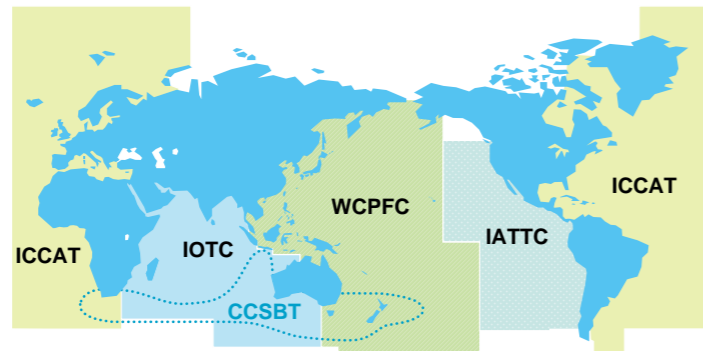


図3 世界の海のマグロ類の資源管理にかかわる国際機関



メキシコにおける太平洋クロマグロの群れ



畜養イケスの漁網

## 太平洋クロマグロの資源状況

2014年4月、ISCが公表した最新の資源評価結果では、太平洋クロマグロの資源量は歴史的な低水準に低下していることが明らかとなりました。全資源量は44,848トン、産卵可能な親魚の資源量(産卵親魚量)は26,324トン、これから漁獲対象となる幼魚数(加入量)が約700万尾と、ピーク時の20%以下の水準にまで低下してしまいました(図4)。<sup>3</sup>

一方、2014年5月に行われたIATTC SACにおいて、産卵親魚量がISCの推定量の約半分の1万トンを下回る可能性も示唆されており、早急に資源回復のための行動を起こす必要性が提言されました。<sup>6</sup>

### 漁獲規制と将来の資源予測結果

ISCは、現在の漁獲量のままでは、過去に例を見ないほどに太平洋クロマグロ資源が枯渇してしまうと警鐘を鳴らしています。しかし、すぐに未成魚の漁獲量を、2002~04年の50%の水準まで削減させることができれば、産卵親魚量は10年間で歴史的中央値(47,625トン)まで回復するとだろうとも報告しています。<sup>3,8</sup> また、IATTC SACでは、この歴史的中央値とほぼ同じ数値の基準値を設定し、この基準値よりも資源量が低下しないように管理するよう勧告しています。<sup>2,7</sup>

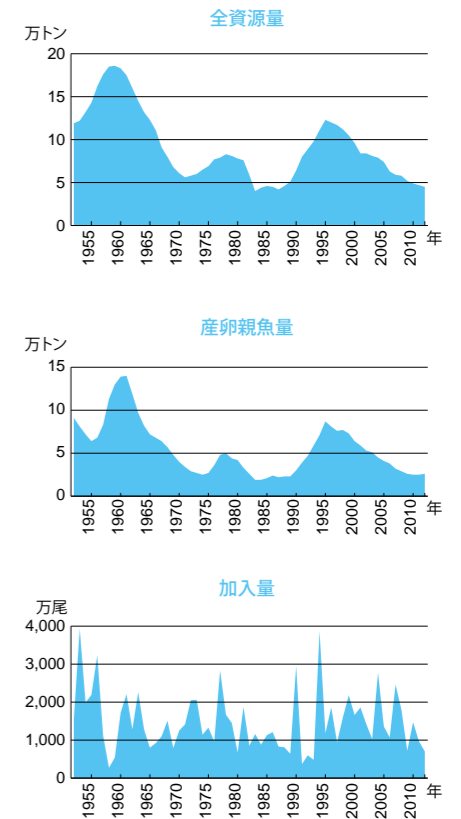


図4 ISCによる資源評価結果(2014年4月)

## 資源管理について

2010年に勧告されたWCPFCの保全措置は「漁獲圧の低減と未成魚漁獲量の削減(2002-04年比)」でした(表1)。しかし実際の2009~11年の漁獲圧は、減少どころか未成魚を中心に増加しており\*、実効的な保全管理措置を実行できているとは言えません。

### 問題点

ISCが勧告する、「未成魚漁獲量のみ50%削減」という措置を実現するためのハードルは大きいと考えられます。未成魚は様々な地域・漁法で漁獲されおり、特に定置網漁や曳き縄漁で、他魚種と混ざって漁獲されることも多く、太平洋クロマグロのみの漁獲量を抑えることは難しいと考えられます。また、まき網漁についても、未成魚・成魚が混ざって漁獲されるので、未成魚のみを漁獲しないようにすることは困難だと考えられます。よって、持続可能な太平洋クロマグロ資源利用のためには、国や漁業者による漁業管理のみに頼るのではなく、企業も未成魚(メジ・ヨコワ)を取り扱わないなど、太平洋クロマグロ消費のあり方を見直していく必要があるでしょう。

発行年	保全管理措置
2011年 (2010年勧告)	漁獲圧を2002-2004年水準より低い水準で管理し、未成魚(0-3歳)の漁獲量を2002-2004年水準から削減。(韓国は例外)
2014年 (2013年勧告)	漁獲圧を2002-2004年水準よりも削減し、未成魚(0-3歳)の漁獲量を2002~2004年平均漁獲量から少なくとも15%削減する。

表1 WCPFCにおける保全管理措置の推移

\*2002-2004年に比べ次の割合で増加:0歳19%、1歳4%、2歳12%、3歳31%、4歳60%、5歳51%、6歳21%